「幼稚」な政党への審判

「政権再交代」して迎えた二〇一三年。やはり、師走の衆院選のことに触れざるを得ない。三年前に圧倒的な支持を得た民主党がなぜ大敗し、自民党が復活したのか――。

投票日の昨年一二月一六日夜から議席が決まる一七日未明にかけての民主党北海道、自民党道連幹部の行動が頭を離れない。

札幌市豊平区の選対事務所。北海道三区から立候補した荒井聡氏が両手を挙げて笑顔を見せた。小選挙区では自民新人に敗れ、辛くも比例代表で復活当選を果たしたからだ。民主党は候補を擁立した道内一一小選挙区で全敗し、当選は比例の二議席のみ。道一区で僅差で敗れた横路孝弘氏が早々と比例復活を決めていた。最後の議席に滑り込んだ荒井氏としては素直な感情表現だったのだろう。だが、荒井氏は民主党北海道の代表だった。

一方、自民党道連はどうか。小選挙区と比例を合わせて一四人が当選し、道内第一党の座を奪還したが、大半の当選者は万歳せず、「日本再生へガンバロー」と拳を挙げた。当選者が浮かれることを懸念した伊東良孝道連会長が事前に「万歳はしないように」と指示していたからだ。

◇　◇

民主党が政権を担った三年余り。民主党の「幼稚さ」ばかりが目立った。八ツ場ダム建設や沖縄の米軍基地移転問題の迷走。党内主導権を巡る醜態……。外交上の進展もほとんどなかった。

衆院選でも、明確な戦略があったのだろうか。野田佳彦首相（当時）は自民党の安倍晋三総裁との党首討論の場で、年内解散をいきなり表明した。まさかの展開に、うろたえる安倍氏。民主党内からは「どちらがリーダーにふさわしいか、はっきりした」と評価する声もあった。野田氏にしてみれば、小泉純一郎元首相ばりの「サプライズ」を仕掛けたつもりだったのだろう。だが、有権者は小手先の仕掛けにつられることはなかった。

三年前に、有権者は民主党に大きな期待を寄せた。長引く経済の低迷。不安定さを増す雇用状況。年収は減り、非正規雇用は増えた。若者は大学を出ても正社員になれない。こうした閉塞状況を変えてくれるのではという期待だった。だが、有権者は「夢」だったと見切りをつけたのだ。

「民主党王国」「民主党発祥地」とさえ言われた北海道でも同様だった。自民党が大勝した二〇〇五年の「郵政選挙」でも、道内では民主党が勝った経験が、民主党北海道幹部の判断を鈍らせたのだろうか。議席の大幅減が必至なのにもかかわらず、具体的な選挙戦略を描けないまま、衆院選に突入し、崖下に落ちていった。

衆院選公示直前で、鈴木宗男氏が代表の新党大地との選挙協力が破談した。大地の現職がいる道一一区、一二区以外にも民主が譲り、選挙協力が実現していれば、小選挙区でもいくつかのの議席が獲得できただろう。そもそも選挙戦略を描ける幹部がいなかったのかもしれない。

投開票日の民主党北海道と自民党道連のトップの行動の差は、政党の力量を如実に示している。「幼稚」な民主党に対し、自民党は「大人」なのだ。大人と子供が戦えば、結果は見えている。

◇　◇

今から約六〇年前、今回と同じような多党が乱立する衆院選があった。終戦から約三年半後の一九四九年一月のことだ。

一九四七年の衆院選では社会党が第一党となり、芦田均氏らが率いる民主党（当時）などと連立政権を作った。しかし、汚職や政権内の抗争があり、失墜。吉田茂が率いる民主自由党が四六六議席中二六四議席を得た。その他は、▽民主党六九議席、▽社会党四八議席、▽共産党三五議席、▽国民協同党一四議席、▽労働者農民党七議席、▽農民新党六議席、▽社会革新党五議席、▽新自由党二議席、▽農民党一議席――など。政党名が異なるだけで、実に今回と似ている。その後、いわゆる「五五年体制」ができあがり、政治が安定するまでには、二回の参院選と三回の衆院選が必要だった。

次の勝負は今夏の参院選だ。民主党が敗戦を糧に、成長できるのか。日本維新の会が民主党を押さえて第二党に躍進するのか。自民党も安閑とはしていられない。衆院選は大人が子供に勝っただけだ。今度は大人の中身が問われる。

＜洋＞